開き舞台 地霊に聴く。
「おくのほそ道」那須幻想

開き舞台のスタートを待つ観季館ホールはカーテンを閉ざして、薄明かりのなか。
ゆっくりと奏でられるチェロの響きが、幽玄な物語の奥へと誘います。
やがて、お能の笛が追奏して、窓の向こうの不思議な舞台に陽が射してくる。
「ゆくはるや　とりなきうおの　めはなみだ」。
空気を震わせて芭蕉の声が聞こえてきます。

＜出演＞

安田 登　能楽師

槻宅 聡　能楽笛方

奥津健太郎　能楽狂言方

楠美奈生　コンテンポラリーダンサー

新井光子　チェロ

白面金毛九尾の子狐太鼓

行春や鳥啼魚の目は泪

場面は春の隅田川、安田さん演じる芭蕉と奥津さん演じるお供の曾良が登場して、これから始まる物語、季節への挨拶が述べられます。あいにくの雨で予定をしていた屋外の石舞台ではありませんが、芭蕉と曾良の「おくの細道」、那須への出立です。

芭蕉「最前申しつけたる舟をば　用意してあるか」
曾良「いかにも　足の速い舟を　用意いたしましてござる」
芭蕉「さらば　やがて出そうにて候」
曾良「心得まし た　さぁさぁお舟に」

谷中の桜が咲き誇る春のなか、ゆったりと舟が進みます。擢を動かしながら曾良が芭蕉に、ふと尋ねます。

曾良「日光への旅は　いずれも陸路をお使いなさるるに　私どもはなぜ舟で参りまするぞ」
芭蕉「汝は　日光の古き名を知っておるか」
曾良「たしか……　二つに荒いと書いて　二荒(ふたら)とは申しませぬか」
芭蕉「二荒とは補陀落(ふだらく)のこと　補陀落とは観音様の浄土なり　また舟にて補陀落へ渡る補陀落渡海(ふだらくとかい)という例(ためし)があるに」
曾良「これはいかなこと　補陀落渡海とは死の行法のことではござりませぬか　これは　舟を返しましょう　私は死ぬのはいやでござる」

慌てて罹を忙しく動かす曾良に、芭蕉は落ち着かせます。

芭蕉「いやいや　一度死ぬるは　ふたたび生まれ変わらんがためにて候　心静かに舟をこぎ候へ」
曾良「これが心安ういらるるものか　そのようなことを仰るによって　風が強うなってきた　波も荒くなってきた　ありゃ　ありゃ　ありゃありゃありゃありゃ……　シー」

あらたふと青葉若葉の日の光

強くなる波風に、笛の音も天候の急変を告げて、高く鳴ります。そうこうするうちに、舟は千住の岸へと無事にたどり着きます。二人は舟を降り、この世への帰還に安堵して、さて日光へ。早足に舞台を回る芭蕉と曾良。旅は、まるで早回しビデオを見るかのように草加、春日部、宇都宮。名物の煎餅が、最中が、鮫子が食べたい、と食いしん坊の曾良につきあううちに、あっと言う間に室の八島へ。

曾良「ここは室の八島　ちと参詣し　その後　日光へ急ぎましょう」
芭蕉「急ぎ候ほどに　これははや日光に着きて候　さては　この日光は　いにしえ　二荒山と称するは　空海大師　日光と改め給う」

おや、日光に参詣できた嬉しさか、曾良が何やら竿をバタバタと振り回しています。芭蕉が尋ねると、なんでも、その竿で「まだ妻を娶らぬ自分にゲストの女性からよいオンナを釣ってみたい」とか。狂言師奥津さんの軽妙なふるまいに笑いが湧くうちに、場面はいよいよ那須野ノ原へ。「これははや那須野ノ原に　着きて候　遥かに一村を得て候」。二人は、今日の宿を求めようと、彼方に見える村を目指して、まっすぐな道を急ぎますが……。

芭蕉「や　あら不思議だ　にわかに日も暮れて候」
曾良「まことに　まだ朝のうちというに　にわかに陽が落ちてござる」

そのうち、雨も降り出して、道を急ぐ芭蕉と曾良。低く響くチェロの音、細く鳴る能管。「雨はさっきから降っている　雨はさっきから降っている　雨は……」。

ようやくのこと人家が見え、一夜の宿を無事に得て、曾良は芭蕉に御酒を供して旅の疲れをねぎらいます。「汝も飲み候え」と、芭蕉の勧める御酒の杯を、修行中の身にてと遠慮していた曾良。ですが、ここは旅の空の下、「いや　左様ならば　ひとつ下さりましょう」と、一杯が二杯、二杯が三杯にと、やがてすっかり調子に乗って舞の披露にかかります。

「さても　さても　よい酒じゃ　これはちと酔いました　おもしろうなった　ひとつ舞いましょう」。ふらりふらりしながら、拍子をつけてにぎやかに舞ううちに、酔うた、酔うたと曾良は寝込んでしまいます。芭蕉もそろそろ夜も更けたか、と寝に入ります。

灯りも落ちて、あたりに夢の時間を作るかのようにチェロが柔らかな響きを奏でるなか、能楽師安田さんの謡による、不思議な物語がそろりと幕を明けます。

「こんな夢を見た　六つになる子供をおぶっている　たしかに自分の子である　ただ不思議なことには　いつの間にか目がつぶれて　青坊主になっている……」

夏目漱石の小説『夢十夜』から、第三夜のお話。ゲストの皆さんも思わず、引き込まれる話は、まだご覧になっていない方のために伏せておきましょう。

「雨はさっきから降っている　道はだんだん暗くなる……」。また那須の地でいずれの夏の夜に、安田さんの謡と出会っていただくお楽しみに。

かさねとは八重撫子の名成るべし

夜が明けて、夢の記憶にいぶかりながらも、ふたりは那須野ノ原へと旅を続けるのですが、奇妙なことに昨日とは道が変わっているかのよう。歩くうちに迷ってしまいます。幸いにも、出会った少女に路案内を頼むことができたのですが……。

曾良「もうし もうし かさねどの そなたは 最前からなにも申さぬが なぜそのように黙ってござる 我ら道に迷っておれば そなたに案内を頼むに そのようにしていては なにやら 心持ちが悪うござる かさねどの かさねどの」

モノ言わぬ少女に案内されるまま、道を行くうちにさしかかったのは、空を飛ぶ鳥がつぎつぎと落ちる、おかしな匂いのする場所。石の上を飛ぶ鳥が「あれあれまた落ちたまた落ちた」。

芭蕉「これこそ名にしおう殺生石」
曾良「これが名高き殺生石でござるか」
芭蕉「殺生石の謂れを知っておるか知らぬと申さば語って聞かせ候えば」

「おくの細道」に、「石の毒気いまだ滅びず、蜂、蝶のたぐひ、真砂の色の見えぬほどかさなり死す」とある、殺生石。そこへにわかに現れいでたるは、九尾の狐の怨霊か。狐の面をかぶり、白装束に身を包んだ楠見さんが登場します。

妖しく舞う狐に、芭蕉が殺生石の物語を語り、お払いの経を唱え、数珠をそろりそろりと繰る。そこへ、いっせいに装束姿の子供たちがはいってきます。それぞれ大太鼓、小太鼓の前に陣取り、叩き始めます。最初は穏やかに、やがて勢いを増して響く子供たちの息の揃った拍子取り、迫力のある太鼓と鉦。取り葱かれたように激しくなる狐の舞。

ゲストの皆さんの前にダイナミックに現れた那須の幻想に、引き込まれるようです。やがて太鼓が止み、能管、鋭く一声。取り残された狐は凍りついたかのように足を上げ、手を挙げ、ただ白く光るばかり……。

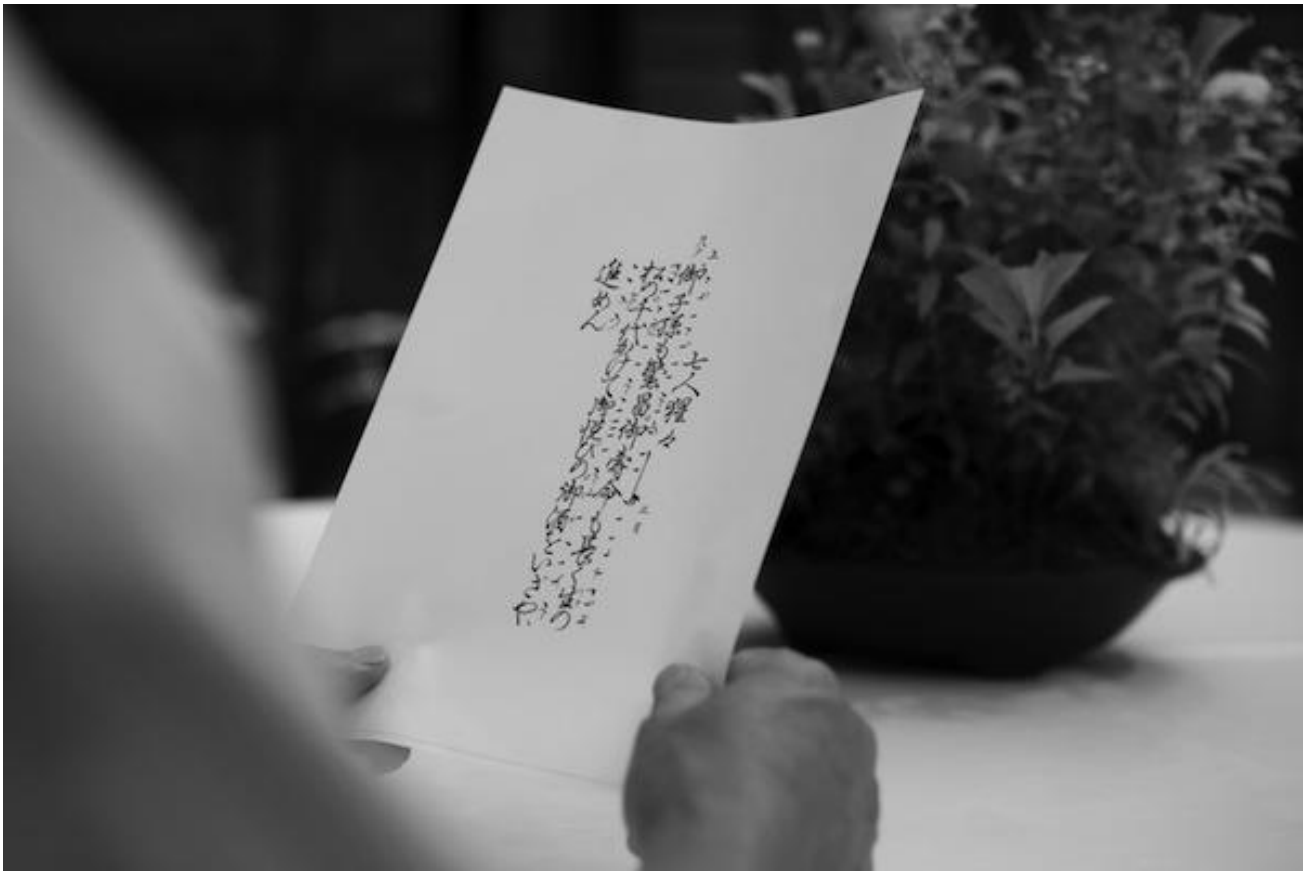
芭蕉「さてはさては　不思議なことじゃ　静まってござる　狐とは稲荷の明神　稲荷とは稲　まさしく再生の神にて候　目出たき折なれば　一指し御舞え候へ」
曾良「かしこまってござる」

安田さんの謡、奥津さんの鎮魂の舞で、「おくの細道」那須幻想の旅もこれにて落着。会場中から大きな拍手が何度も送られました。

能と狂言にゆかりの深い那須の土地

安田登 この二期で「おくの細道」をやりたいと思ったきっかけは、那須の遊行柳、殺生石など、能や狂言とゆかりの深い土地であることです。じつはこの夏、不登校のこどもたちを連れて、東京から那須まで歩く旅をしました。八日間歩いてみると、思いもかけないことがいろいろ見えてきました。芭蕉にとっての日光までの旅は、世俗を離れて一度死ぬ旅だったこと。たいへんな苦労をして俳諧師になったものの、思うようにいかない我が身。一度自分を殺してまで、新しく俳諧師として再生するための旅だったのではないか。芭蕉の夢を表現するために夏目漱石の『夢十夜』も謡ってみました。

では、最後に皆さんとご一緒「七人猩々』を謡いたいと思います。昔はお酒を飲む前に一緒に謡って、勢いよくワハハと杯を飲み干すのが宴会の習いでした。では参りましょう。

「御子孫も繁盛御寿命も長く生の松の千代かけて御悦びの御酒をいざや勧めん」

めでたい謡を唱和し、ゲストの皆さま、講師の方々とも打ち揃って、2010 年の「山のシューレ」の成功を祈り、那須の夏の芸術文化物語、開幕の宴を楽しむタベとなりました。